

オーバー・
フィフティー
Over
50

3

古橋さんは、「生徒にも、一生懸命になれるものを見つけてほしい」と、自身が小学生から続けてきた柔道を通じて生徒と向き合う。

赴任してまもなく、こんな

銀行員経験 人育てる

堺市立若松台中学校長 古橋 章秀さん 54

生徒同士のもめごとで、加害者側の男子生徒が相手に謝罪の言葉を伝える場に同席した。後で校長室に呼んだ男子生徒に、「きみは素直に、ごめんと言った。それはとても大事なことだ」と声をかけ、力を持て余しているように見えたので、「もしよかったら、柔道を始めてみないか」と誘った。

練習から一緒に帰っていたある日、街角で爆音を響かせて集団走行するバイクを見か

けた。「先生、柔道をやっていなかったら、僕もあんなふうになつていたと思う」。男子生徒がぽつりとこぼした言葉が胸に残った。子どもは、活躍できる場所さえあれば、どんどん伸びていく。柔道を勧めてよかった。そう感じた。

100

古橋さんは福岡県出身で、東京学芸大に進学。中学、高校の体育教員の免許を取ったが、「民間で働くことの方が輝いて見えた」と、卒業後は地元に戻って福岡銀行に就職

した。08年、39歳で課長に昇進。管理職になり、部下から仕事の相談を受ける機会が増えた。「人を支えてあげたい性分なので」、とことん話を聞き、アドバイスをした。

人を育てることについて、関心が強まった。きちんと学んでみたい。13年に43歳で九州大大学院（福岡市）に入り、週に2日、仕事が終わってから教育学に関する講義を受け始めた。転勤で福岡を離れた期間の中断を挟み、19年に修了した。

在学中、担当教授から学びを生かす道として提案されたのが、民間人校長だった。もともと、一つの職場で人生を終えるよりも、新たな仕事にチャレンジする道を選びたいと考えていた。偶然、知人が堺市教育委員会の募集を見つけてくれたので、応募した。

101

銀行員として、事業に成功した人、失敗した人、家庭の主婦にも会ってきた。いろいろな立場の人と接して社会の实情を見てきた経験は、これから社会に羽ばたく子どもへの指導にも役立つはずだ。「学校での学びが、社会につながるようにしてあげたい」

23年12月上旬にリモートで実施した全校集会では、生徒がいる各教室のモニターとつながったカメラに向かい、「これから時代は、自ら考えて学ぶことが大切です。一生、学び勉強し続ける気持ちを忘れないでください」と語りかけた。

は、一年ごとの更新で最長3年。今は、任期が終わった後、何らかの形で教育現場に携わり続けたいと考えている。「子どもたちに『こんな生き方もあるんだ』ということを示したい。そのために自分もまだまだ学び続けます」。まっすぐなまなざしで、先を見据えた。

(松本慎平)

(松本慎平)



Ⓐ柔道に打ち込む自校の生徒の練習相手になる古橋さん（堺市西区で）
Ⓑ生徒に学びの大切さについて話す古橋さん（堺市南区で）

自分が一番、活躍できる時期だと思う